

戸坂潤と申南澈の認識論比較

趙 熙 榮

一

この小論は、一九三〇年代の時代精神史研究の一環として、日本の唯物論者戸坂潤と韓国の唯物論者申南澈（しん・なむぢよる）の認識論における異同点、相互影響関係などをしらべてみようを試みたものである。論述の順序は、まず日本の哲学界にほとんど知られていない申南澈の認識論を紹介し、その後申南澈と戸坂潤の認識論について若干の比較考察を進めたい。

申南澈（一九〇六—一九五七）は、一九三一年京城帝国大学法文学部哲学科を卒業して、日本統治下においては母校の助手を勤めた。解放後にはソウル大学校師範大学の哲学教授として勤めながら唯物論の立場で観念論を痛烈に批判する講義をしたが、大韓民国政府が樹立された一九四八年に越北して金日成大学教授となっ

た後に死去した。

申南澈が北の方に行ってしまったので、韓国では彼が越北前に書いた著書『歴史哲学』（ソウル出版社、一九四八・二）、『転換期の理論』（白楊堂、一九四八・五）などは絶版になっている。ここでは、日本統治下において京城帝国大学法文学部出身の若手の筆陣によって産み出された学術誌『新興』第九号（一九三七年）の冒頭に載せられている申南澈の論文「認識・身体及歴史」によって、彼の独自の認識論である「身体的認識論」を紹介することにする。

二

申南澈の身体的認識論は、マルクス主義哲学を基礎としている。マルクスは『ドイツ・イデオロギー』という著書の中で、「すべての人間の歴史の最初の前提はもちろん生きている人間の個体的

生命である。それゆえに、確認されなければならない最初の事態は、このような個体の身体的組織とそれによって与えられた、それ以外の自然に対する身体的組織の關係である」と書いているが、このようなマルクスの主張が申南激の身体的認識論の出発点となったのである。

申南激は、「肉体」(Leib)と「身体」(Körper)を区別している。彼によれば、肉体は「心」(Seele)に対応する概念であり、身体すなわち人間の身体(menschlicher Körper)は「意識」(Gegist)に対応する概念である。申南激は、身体という言葉で物理的乃至生理的身体(Physischer Körper)を考えず、人間の身体の思想性を考えている。これをニコライ・ハルトマンの用語で再表現すれば、さしづめ肉体は「心的存在」(Geistliches Sein)に該当し、身体は「精神的存在」(Geistiges Sein)に該当するのである。周知のようにハルトマンは、存在を実在的存在と理念的存在とに分けているが、このうち実在的存在は、無機物(物質)、有機体、心的存在、精神的存在などが層をなしている。人間はもちろん有機体であるが同時に心的存在であり、精神的存在である。

このようなハルトマンの存在論における人間観と同じく、申南激の身体的認識論においても人間の肉体的な面と身体的な面はその段階が異なる。そして申南激によれば、認識の主体は低い段階の肉体的自己乃至高い段階の身体的自己であり、認識の対象は現実の雑多な現象のあらゆる關係である。申南激の認識論において

は、肉体としての自己が身体としての自己にいたる自覚過程が弁証法的に展開されている。

三

申南激は、認識の過程を①「受容」、②「加工」、③「表現」の三段階に分けている。

①「受容」(Aufnehmen)——受容とは肉体的受容すなわち感覚的受容を意味する。認識は肉体による対象の感受からはじまるのである。しかし、認識の対象である外界は認識主体の感覚とは別に独立している。認識は「感覚から外界への方向」ではなく、

「外界から感覚への方向」で成立する(實在論)。そして、感覚は脳髓、神経及び網膜など特殊な方式で組織された物質に依存する(唯物論)、人間の肉体には生理心理的に「模写可能性」(Abbildungsfähigkeit)が与えられている。この模写可能性に外界の抵抗や圧迫が加えられて認識主観に模写作用が起こるのである(模写説)。

肉体にある模写可能性が対象を受容するということは、換言すれば、感官的感性が対象に触発されて直観的受容をなすということであり、この点で見れば、申南激の挙げた「受容」は、カントが指摘した感性の受容性(Rezeptivität)と似ている。しかし、カントと申南激の間には立場の相違がある。カントはあくまで構成説という観念論の立場であり、申南激は外界の实在を認める实在

論の立場である。そして、この点が後述する戸坂潤の認識論と申南澈の認識論との共通点である。

②「加工」(Verarbeiten)——加工作用とは認識主観が受容したものに對して内容性を与えて解釈することである。加工作用の段階においては単純な感性的知覚の段階を越えて悟性能力のもつ自由性が増大する。これはカントが悟性を自発性をもつ思考能力と見たのと同様である。そしてカントにおいて悟性が直観の雑多をカテゴリーによって綜合して判断を成立させる思考能力であったように、申南澈においても加工における判断作用が認められている。しかし、申南澈がこのような判断作用に自己の過去の經驗を生かしての判断作用、またマルクス主義者らしく自己の出身成分すなわち身分、階級関係などによる判断作用、その他、からだのコンディション、体質、性格などによる判断作用をつけ加えている点がカントと異なっている。申南澈によれば、受容された内容は判断によって一応整理されるが、加工作用は受容された内容に對する単なる構成的作用ではない。そこには既に弁証法的發展がある。そしてこの段階において意識内容に對する明確な規定が与えられるのである。

③「表現」(Ertäuern)——われわれの現実的認識においては、認識作用は「受容」と「加工」による一定の判断だけで終るのではなく、判断したものを外部に表現せざるを得ないのである。認識は実践によって完結されるのである。認識によって思考された

ものは物質的に身体化(Verkörpern)されなければならない。この身体化が思想的所信の外部化、具体化であり、認識の表現的段階である。この段階において思考と存在、理論と実践が統一される。

そして、肉体と身体は同じながらも區別される。すなわち弁証法的展開の段階を異にする。身体は感性的肉体が悟性の作用を媒介として認識論的活動を完成(Ausarbeitung)させることによって生じた主体である。身体はこのような意味で肉体よりも高次の段階である。

四

さて、申南澈は何のためにこのような身体的認識論を熱心に唱えたのであろうか？ それは、マルクス主義にのっとった革命的実践をうったえるためであった。

申南澈によれば、身体的認識論はまさしく実践的認識論である。肉体にとっては感性的模写が重要な課題であるが、身体にとっては実践的認識が重要な課題である。しかし、このふたつは社会的人間において統一される。申南澈によれば、本質的人間規定はホモ・ファールベルである。申南澈は、homo labor を労働的人間と訳した。したがって、人間の実践的行為は労働である。労働は生産であり、創造である。労働においては言うまでもなく、手、道具、機械などが重要な役割をなす。そして、個人は労働を媒介と

して社会的関係に入るのである。

社会的人間は歴史的实践を通じての政治的実践にいたり自己の労働と創造を完成する。人間は社会的存在として歴史を創る。したがって、身体的認識は実践的認識であり、実践的認識は歴史的认识である。このようにして申南激の認識論は歴史哲学と関係を結ぶ。彼が歴史哲学の基礎理論として身体的認識論をまず問題としたのもこのためである。

それでは、実践的認識としての歴史的认识はいったいどのようなものであるか？ 申南激によれば、人間の実践的認識は、それが歴史的状况のなかで生きている人間の認識であるからには、歴史的状况における人間存在を根底から (von Grund aus) 把握しなければならぬ。そして、人間存在を根底から把握するということは、人間存在自体の赤裸々な様子を根源的に認識することである。申南激は、この部分で暗示的に書いているが、当時の日本統治下にあった朝鮮の実情に対して目をそむけず、はっきりと見きわめることを要請している。

このように申南激によれば、人間の実践的認識は歴史的认识となり、歴史的认识は根源的認識とならなければならない。そして、根源的認識は「事実をその根底から把握すること」である。このようにして根源的認識は矛盾に満ちた現実の歴史的地位を肌身に痛感することであり、人はこの身膚に徹した自覚から歴史における個人の役割のために一身を投げだすパトスの行為にいたるのである。

(一)

以上、申南激の身体的認識論について論じたが、これが結局マルクス主義的な革命理論であることが明らかになった。申南激は身体的認識論を三段階に分けて説明しているが、最後の段階において実践的な革命への道を説いている。申南激の身体的認識論は、当時帝国主義日本の支配下にあった朝鮮の若い哲学者たちが共通に求めていた現実打破のための革命哲学の典型と見なすことができる。

五

次に戸坂潤の認識論を『認識とは何か』(山岸辰蔵と共著『認識論』所収、三笠書房刊、一九三三年)という著作によって考察しながら申南激の認識論と似ている所を拾ってみることにする。

戸坂潤の認識論上の立場は、彼自身が名付けたように「実践的模写説」である。戸坂によれば、「実在リアリティー」の認識が真理である。実在のリアリティーに準じて認識のリアリティーが真理となり、真実になる。このようなリアリティーとしての真理があればこそ、明白であり、普遍的であり、具体的であり、有用である真理の客観的構成が可能になるのである。真理という言葉はリアリティーという言葉とおきかえてもよい。

そして、認識は実在を認識する。実在たるリアリティーに対応照応するリアリティーが認識の内に再現するならば、そこに真理

という関係が成立する。真理認識は實在のリアリティーの再現である。この再現関係が反映とか模写とか呼ばれるものである。認識が外部の客観的實在の認識である限りは、認識は實在の再現であり、反映であり、模写である。認識する（知る、見る、認めるなど）とは写すということである。このような戸坂の模写説は申南澈の模写説とまったく同じである。

それから、戸坂によれば、實在に対する模写認識を實際的に遂行するためには、知覚（普通感覚と呼ばれている）乃至感性を第一の媒介者とし、更に悟性によって指導されることを必要とする。そして戸坂によれば、模写＝認識はいわば実践的な模写であるから、これに根拠して実践的模写説が成立するのである。このように戸坂が実践的模写説の立場で、認識過程を感性的知覚、悟性的思考、実践の三段階に分けているのも申南澈の認識論と通ずる点である。

それから戸坂によれば、実践的模写は、模写の実践的遂行において、歴史的なものから論理的なもの抽出という過程を辿らねばならない。人類の認識はこうした過程を辿ることによって発達し、それによって初めて真理を獲得するのである。このような戸坂の所説も申南澈が強調した歴史的認識、根源的認識を連想させるほどに両者の間には類似点がある。

戸坂はまた、『科学論』(三笠書房刊、一九三五年)の中で、認識するものは死んだ鏡でなくて、社会的に生きている実践的人間で

あることを指摘しながら、社会における社会人としての人間活動すなわち生産活動、政治活動こそ実践の意義にそのものであると説明している。ここで戸坂が認識の実践性を論じながら政治活動を挙論しているのも、申南澈の革命理論と一脈相通する点である。

六

以上、申南澈の「身体的認識論」と戸坂潤の「実践的模写説」の要旨を論述したが、両者が共に実践を重視するマルクス主義認識論であることが明らかになった。レーニンのは、彼の著書『哲学ノート』の中で既に認識の過程を①「直観」、②「思考」、③「実践」の三段階に分けている。また毛沢東も、彼の著書『実践論』の中で認識の過程を①「感性的認識」、②「理性的認識」、③「実践」の三段階に分けている。マルクス主義認識論における実践の重要性は今更重言する必要がない。

それから、この小論の中で主に参照された申南澈の論文「認識・身体及歴史」は、一九三七年一月に朝鮮で発表されたし、戸坂潤の著作「認識とは何か」は、一九三七年十月に日本で発行されたにも拘らず、両論著の内容に驚くほど共通性があるのは、両論著が同じくマルクス主義の立場で書かれているためである。

もちろん申南澈の身体的認識論と戸坂潤の実践的模写説は同じくマルクス主義の立場に立ちながらも、おのおの独自性をもって

いる。とくに申南澈の身体的認識論は、既に指摘した通りに祖国解放のための革命理論と見るべきである。

それでは、戸坂潤と申南澈との間にはどんな相互影響関係があったらうか？ 戸坂潤は申南澈よりも早く『現代哲学講話』（白楊社刊、一九三四年）、『科学論』（三笠書房刊、一九三五年）、『現代唯物論講話』（白楊社刊、一九三六年）などの著書を一九三〇年代につきつぎと出したので、マルクス主義に関心があった申南澈が戸坂の著書を読んだ可能性は大きい。しかし、申南澈はギリシア語、ドイツ語などの原典にとりくんで、『ヘラクレイトスの断片語』⁽⁶⁾の翻訳もしたことがあるので、戸坂の著書から学問的な影響は、あまり多く受けなかったであろうと思われる。ただし、同じマルキストであったので、申南澈が戸坂潤に対して親近感をもっていたであろうことはたやすく推測され得よう。

それからもう一つ、この機会にぜひ書きとめて置きたいことがある。それは、戸坂潤が当時の日本留学中の朝鮮人学生たちと交流があったことである。一九三七年に発刊された早稲田大学朝鮮人在学生たちの同窓会誌創刊号によれば、戸坂潤は学芸部学生たちの招聘に応じて、一九三六年十一月十八日大隈ホールにて「学生とヒューマニズム」というテーマで午後三時から一時間余りの講演をしている。そして講演後に戸坂と学生たちとった記念写真が同窓会誌の巻頭を飾っている。このような事実を、戸坂潤が当時の被支配民族であった在日朝鮮人学生たちに対してあたたか

い同情心をもっていたことを立証すると同時に、また志ある朝鮮人学生たちが戸坂の学風に対して欽慕の情をもっていたことを示すものである。

七

以上、日本と韓国において長い間かえりみられなかった日本の代表的唯物論者戸坂潤と、これに比肩する韓国の代表的唯物論者申南澈の認識論をとりあげてその異同点を探ってみた。日本の哲学界に目新しい申南澈の哲学思想の紹介に注力したあまり、戸坂の哲学思想については少し書き足りない点もあるが、それでも一九三〇年代の時代精神を反映し、創造した両哲学者の常識にその認識論の特色が一応くっきり浮刻されたと思う。

- (1) Karl Marx. Die Frühschriften (Alfred Körner Verlag Stuttgart, 1955) S. 347.
- (2) 申南澈「認識・身体及歴史」（『新興』第九号所収）一六頁。
- (3) 同書、二五頁。
- (4) 『戸坂潤全集』第三卷（勳章書房刊、一九六六年）四四二頁。
- (5) 同書、四四四頁。
- (6) 『哲学』創刊号（哲学研究会刊、一九三三年）所収。
(ちょう・ひよん、哲学、全南大学校教授)